

## 学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第20回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

**日付：5月30日（火）1日目**

**大学名：清華大学**

**氏名：顧欣宇**

この日の午前10時、私たち5人は清華大学の北東ゲート近くのサブウェイに集合し、一緒に車で首都国際空港に向かい、11時に到着した。飛行機は当初14:30の離陸予定だったが、2時間遅れたため私たちは約5時間の自由時間ができた。普段これほど長い自由時間はないので、私にとってはこれ以上ない楽しい時間だった。私は普段携帯に保存している気に入った言葉などをノートに整理し、高価な昼食を食べ、頼まれた商品を免税店で購入するなどしてから飛行機に搭乗した。

先生方の手配はとても行き届いていて、私たち清華の学生は同じ列に座った。出発前、皆は互いに見知っていたわけではなかったため、機内で私は王徳標、韓儲銀さんと色々な話をし、互いに生い立ちやポリシーなどについて語り合ったことで相手の人となりを知り、親しくなることができた。私たちはさらに実家や恋愛状況、そして価値観などについて語り合った。

おしゃべりの時間はあっという間に過ぎ、私たちは関西国際空港に到着した。機内の日本人乗務員について私が最も印象深かったのは、とても礼儀正しかったことである。飛行機を降りた私たちは、関西国際空港のビュッフェレストランでの夕食となった。これは私にとって初めて日本式のレストランでの食事となった。これまで寿司や刺身といったものは食べたことはあったが、本場の日本料理の食事環境や食品自体へのこだわりはとても印象深いものであった。

大阪での時間はこの食事の時間のみであった。食事の後バスで京都のホテルに向かう際、関西空港は海を埋め立てて造られたと知った。私たちは今海の上に浮かんでいるのである。耐えきれずに窓から外の海の景色を眺めたが、本当に美しかった。私はこの静かな美しさを何と表現すればいいのかかわからない。驚くほどの美しさであった。

**日付：5月30日（火）1日目**

**大学名：中国人民大学**

**氏名：呉成庚**

多忙な学生生活から抜け出し、5月30日午前には訪日活動が正式に始まった。

各大学の学生が続々と空港に到着し、訪日団のメンバーが集結した後になって、飛行機が遅れるという知らせを受けた。しかしこのフライトの遅れにより、私はその後今回の訪日における大きな意義について知ることとなった。

本来14時過ぎのフライトが16時半に遅れたため、日本に到着したのは現地時間の21時過ぎであった。この遅れは本来の計画を乱し、空港のレストランもサービス時間を1時間延長したほどであった。税関を抜け、ゲートから出るとすぐ、私たちを待っていたレストランのスタッフ、そして横山先生やガイドの中島さんそしてJTBのスタッフを見かけた。彼らはきっと長い時間待っていたであろうが、皆笑顔で私たちを出迎えてくれた。横山先生は口数がさほど多くなく、想像とは違っていたが、私たちを辛抱強く待っていてくれたのにはとても感動した。またガイドの中島さんは車内で様々な紹介や注意事項の説明などをしてくれ、多少の疲れを見せながらも私たちに笑顔で細やかなサービスしてくれた。

深夜の京都には北京のようなぎやかさはなく、小都市のような静けさであった。日の出を静かに待つその様は、来て間もない私も同じであった。

日 付：5月30日（火）1日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 陳卓

飛行機の轟きと共に私たちを乗せたNH980便は高度を上げ、北京の夕暮れの中、今回の訪日の旅が始まった。

1万メートルの上空では、その視界は地上とは全く違っており、遠くには黒い大地とダークレッドの夕焼けが繋がっていた。また飛行機は宇宙に浮かんでいるように時に左右に揺れ、時に上下に大きく揺れていた。雲と霧に包まれると空が真っ暗になった錯覚を与え、雲から抜けると四方は明るく広々とし、安心感をもたらしてくれた。こうした環境、1万メートルの上空にある飛行機の中で、私は「カニかなんかの一對のボロ爪になってしいんとした海の底を急いで渡ってたほうがよかったね」の詩を思い出し、静けさの中の暗い波とうねりは、海の向こうの日本はどのような国なのか、日本にはどういった人々がいるのか、今回の訪日ではどのような出来事が待っているのだろうかということを考えていた私のこの時の気持ちを表していた。だから私は日本への到着を待ち望みながら、高度11,172メートル、機外温度マイナス52度、飛行速度982km/h、目的地まで1時間12分といった飛行機の運航状況と、現在渤海上空にあり、すでに山東半島の最北端を過ぎ、韓国を通過中、日本の領空に突入といった地図上の飛行機の位置を見ていた。そして夜9時過ぎにやっと関西国際空港に到着した。

この時間の日本は夜の闇に佇み、高層ビルの灯りだけが視界に入った。明日には日本をこの目にすることができる。

日 付：5月30日（火）1日目

大学名： 北京外国語大学

氏 名： 徐杭

「人生においては、歩いて歩いても、いつもちょっとだけ間に合わない。」

訪日初日、残念なことに雨で飛行機が遅れたが、その退屈で仕方ない時間を使い、『歩いて歩いても』を読み終えることができた。この日本の映画監督の著書は、日常の料理のように、日本の家庭内の些細な感情をきめ細やかに描き、まるで映画を観ているかのような感覚であった。そしてその画面は私に、間もなく降り立つ土地への一種の言葉にできない親近感を感じさせた。家族間に絆が溢れながらも話が合わず、互いに傷つけ合う無力さ、そして愛する人へ胸の内を打ち明ける際に常に一步遅かったりするという無念さなど、私たちはこれほど多くの共感できるものを持っているのである。

飛行機を降り、あわただしくホテルに向かった。すでに夜も遅く、道中は自分の中にある興奮を抑えることができなかった。2年前からこの国との繋がりを運命づけられていた私が初めてこの地を踏みしめたのである。どれだけ感情が高ぶっても大袈裟ということはないだろう。窓の外の夜の闇に眠っている街を見ながら、心に突然形容しがたい喜びが溢れてきた。まるで明日の朝にはこの街にサプライズを届けることができるかのような感情である。ちょっと幼稚かもしれないが、自分では密かに楽しんでいる。静かな夜の街に身を置くと、この街に静かに受け入れられたような感覚が生まれた。だが2日間という時間では、このあでやかな京都という街の一部しか知ることができないであろう。私たちには歩いて歩いても、いつも手に届かない美がある。これについては将来にとっておこう。

最後に、初めまして日本。どうぞよろしく。

日 付：5月30日（火）1日目

大学名： 北京郵電大学

氏 名： 張少臻

この日私たちは早くに空港に到着した。皆は初めての出国ということで、今回の訪日の旅への期待と緊張が入り混

じっているようであった。

訪日のスタートは搭乗手続からで、ANAスタッフの「いらっしゃいませ」から訪日の旅が始まった。

残念な事に天候が理由で、私たちの飛行機の出発が遅れることになった。中国では日常的に飛行機の遅れがあるため、ひどい遅れでなければ、2、3時間の遅れであれば人々は受け入れる。しかしながらANAの機内で、私は思いもかけず日本人の素晴らしさ、または賞賛すべき点を見つけた。

まず初めに、乗務員がお詫びの言葉を繰り返していた。飛行機の遅れは彼らの責任ではないのだが、彼らのお詫びの言葉にANAの乗客への尊重や思いやりを感じ、遅れたことへの不満も消え去った。さらに素晴らしかったのは、本来3時間のフライト時間を道中急いだことで、2時間程度で目的地に到着したことである。出発が遅れたため到着した時は遅い時間ではあったが、近くにいた日本人のおばあさんの「よかった、間に合った」の一言には心が温かくなる思いがした。ANAが1時間という時間を取り戻してくれたことで、私たちは1時間多く二日目の準備をすることができた。これには感謝の思いである。

日本に到着後、私たちはとても優秀なガイドの方と対面した。彼女の流暢なネイティブのような中国語にはとても驚かされた。そして皆に交通費として1万円が渡された。交通費までも気に掛けてくれたとは知らなかったので、嬉しかった。こうしたことから日本人の細やかさと日中双方の今回の活動への重視度合が感じられた。

初日は飛行機とバスでの移動で終わったが、些細なところから性格というものが見て取ることができる。また、日本に到着しての感想だが、出国前は言葉の通じない国に行くことに不安を感じていたが、飛行機を降りて、または京都に到着して、多くの漢字と中国人とさほど変わらない外見に、出国したという感覚すら感じられず、まるで中国のどこかの街に来たような感覚であった。日中の文化にはやはり多くの部分で共通点が存在している。

もう時間も遅くなったので、これ以上については書かないでおく。今日は移動のみで、日本に関して大して知識を得たとは言えないので、二日目のスケジュールに期待している。

**日 付：5月30日（火）1日目**

**大学名：北京交通大学**

**氏 名：申婉玉**

多少の緊張の混じった期待の中、私たちは訪日の旅をスタートさせた。

雲の上から「井」の字のように並んだ中国の田畑が次第に青い空と一体になった海面に変わる様を眺めながら、間もなく知っているが馴染みのない国に到着するのだと急に気が付いた。そして機内では、私はすでにこの国の優しさを感じていた。

優れたサービスは航空会社が備えるべき特徴であるならば、私を感動させたのは必然的に心温まる些細な部分である。機内では乗務員から4種類のおもちゃから一つを選ぶように勧められた。初めはそれらにさほど興味はなかったのだが、折り紙のパッケージを開けると、その細やかな紹介と中身の彩り豊かさに引き付けられた。優れた企業というのは決してすべての面で他者より優れているわけではなく、その違いというのは、思いついたことを実行するかしないかである。こうした点は正に日本企業の「人間本位」の管理理念を表している。

乗務員のお別れの挨拶とともに、私たちは日本というこれから私たちに多くの知識と感想をもたらす国に入国した。これからの数日、まさに税関のやさしいピンク色のカウンターのように、厳密さは冷たさとは違い、細やかさは融通がきかないのとは違い、そして私自身こうした優しさを周囲の人にもたらしたいと願うように、これら私を感動させる多くの場面が繰り返されると信じている。

そして、明日はさらに気持ちの良いものになると信じている。

**日 付：5月31日（水）2日目**

**大学名： 清華大学**

**氏 名： 連鵬龍**

お早う、京都。

今日の予定では午前におムロン京都太陽を見学し、午後京都大学を訪問することになっていた。訪問先に向かう道すがら、中島さんから道中の観光スポットの歴史や文化についての紹介があり、この長い歴史を持つ古都には、毎年数多くの観光客が訪れているとのことであった。

京都において長い歴史があるのはその文化だけではなく、京セラ、日本電産、任天堂といった企業も長い歴史を有している。私たちが午前に見学したオムロンもその中の一社である。大学一年の夏に参加した「中国大学生光電設計コンテスト」はオムロンが支援していたのを覚えている。今回見学したオムロン京都太陽はとても特徴があり、同社は中村裕氏とオムロン創業者の立石一真氏が共同で設立した会社で、障がい者を主力とした工場である。「No charity , but a chance!」同社では障がいを持つ従業員に自らの価値を実現する機会を与えている。そしてまた同社からは国際的大企業としての心と責任感についても考えさせられた。

純和風の昼食の後、私たちは京都大学を訪れた。英語は多少苦手だが、それでも私はできる限り京都大学の学生と交流を図った。京都大学は日本でもトップクラスの大学で、その自由と独立の精神により多くの人材を育成しており、現在まで9名のノーベル賞受賞者と2名のフィールズ賞受賞者を輩出している。京都大学に流れる自由と反発の血液には尊敬すべきものがある。私自身の考え方とは少なからず違っているため、それらをすべて受け入れるのは難しいが、それでも私はこうした個性のある大学に頭が下がる思いである。

さようなら京都大学、また会いましょう。

お休みなさい、京都。

**日 付： 5月31日 (水) 2日目**

**大学名： 中国人民大学**

**氏 名： 陳子鑫**

今日私たちはまずオムロン京都太陽株式会社の工場を見学し、同社の精神と文化について学んだ。企業精神は「われわれの働きで われわれの生活を向上し よりよい社会をつくりましょう」というもので、これは創始者の立石一真氏がアメリカでの調査の後に提唱した企業理念である。この理念は企業家としては目新しいものであり、企業家が利益の最大化や効率の最大化に重点を置くのではなく、より良い社会の構築を目標とすることからは、社会全体への貢献を自身の責任とするような大きな心が感じられる。またその提携パートナーである太陽の家の創始者である中村裕氏もまた障がい者への安定的な仕事の提供に力を尽くし、彼らの自立を促進するなど、これもまた社会への貢献を目的としている。最も驚いたのは、オムロン京都太陽のある従業員が給与を受け取った際の「やっと納税ができる」の一言であった。これまで職を得ることが難しかった障がい者にとって、職を得た後にまず考えたのは責任である。こうした器量には感服させられた。工場の見学ではまた、スタッフが作業しやすいように多くの施設が特別に造られ、業務効率が確保されていた。こうした点はこれからもっと広め、より多くの障がい者が仕事の機会を得られるようにすべきだと思った。

午後は京都大学を訪問した。そこでは彼らの自由さと見識に衝撃を受けた。弱者に着目し、強権に対抗する。これこそ大学生の持つべき理念である。また京都大学の教授の「科学には国境はなく、人類の進歩の推進を自らの責任とすべき」の言葉に、私は自分が情けなく感じた。これまで自分の視野はとても狭く、いつも損得ばかりを気にしていた。これは高等教育を受ける人間が持つべき器量ではない。

今日の見学から私は、日本の企業家であれ労働者または学生であれ、皆いづれも広い心を持ち、社会について考えていることを知った。これは正に私たちの先祖が重んじてきたものではないだろうか。私もこれから先、自分の視野を広げ、自分の器量を磨き、社会への恩返しを自分の目標とし努力していきたいと思う。

日 付：5月31日（水）2日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：艾倍兆

「われわれの働きで われわれの生活を向上し よりよい社会をつくりましょう」

この感動的なフレーズは午前に見学したオムロン京都太陽株式会社のものである。同社の経営理念と目標には本当に感服させられた。単純な収益ではなく、個人の幸福を目標とする企業、その経営者はどれほどの器量と勇気を持っているのだろうか。その従業員はどれほどの誇りを持って仕事をしているのだろうか。太陽の家の創設者である中村裕氏は東京パラリンピックを通じて（他国の選手との比較により）、自国の障がい者の生活条件や機会の劣悪さを感じ、障がい者が個人能力の発揮ができ、独立できる環境を作ることを決心した。こうした「身体や心のハンデは優れた仕事ぶりの妨げにはならない」という考えは、当時ほとんどの人は持っていなかった。

その後、中村裕氏とオムロンの創業者である立石一真氏がオムロン太陽株式会社を設立し成功を収めた。またその成功の後になって、当初中村氏への協力を断った多くの企業が改めて提携の意向を示してきたのである。このことから立石氏の視野の素晴らしさが見て取れる。両氏の社会を思う心、社会に幸福をもたらすことを己の責務とする考えにはとても感動させられた。人生の意義や価値というのは恐らくこういうものに示されているのだと思う。

春秋時代の陶朱公もまた三度家財を投げ打って「忠義を以って国に仕え、智を以って身を立て、商いを以って富を成し、天下に名を知らしめた」。こうした社会貢献の精神は古くから両国に存在している。

この日の午後は日本の著名な国立大学である京都大学を訪れた。京都大学は自由な学風で、多くの素晴らしい指導者が集まり、人材も多く輩出し、学問に力を入れているなど非常に魅力を感じた。京都大学の優秀な学生と討論ができたことはとても嬉しいことであった。彼らは一見大人しそうで、口数も少なそうだが、実際話をするときにはとても論理的で、頭の回転もとても速かった。その後各グループの討論結果の発表は、京都大学自体より長い歴史のある教室で行われた。聞いた話によると、日本で最初のノーベル物理学賞受賞者である湯川秀樹氏もかつてこの場所でスピーチをしたことがあるという。これには、こうした場所で異国と自国の学生の素晴らしい発言に耳を傾けていることに、一種の神聖さと意義深さを感じた。

日 付：5月31日（水）2日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：李美婷

この日の予定はとても詰まっっていて、午前はオムロン京都太陽株式会社を見学し、午後は京都大学で日本の学生との討論を行った。オムロンの企業としての価値観である「ソーシャルニーズの創造、絶えざるチャレンジ、人間性の尊重」および「われわれの働きで われわれの生活を向上し よりよい社会をつくりましょう」の理念には多くを考えさせられた。障がい者は社会的に弱いグループに該当するが、社会特に企業がそうした障がい者への対策を採ることは非常に得難く貴重である。実は企業見学の際、自分の中には複雑な感情があった。身体にハンデがない自分がハンデを持つ人の職場を見学することに、一種の強者による弱者への同情といったものを感じたからである。そのため、作業をしている彼らの姿を見るのさえ躊躇われた。それでも私は、彼らはとても強く、前向きにチャレンジをしている、勇気を以って生活と向き合っている人たちだということは分かっていた。同社はとても人間本位の精神に溢れ、エレベーターの色分けされたボタンから地面に貼られた様々な色のマークまで同社のそうした精神が示されていた。また最も印象深かったのは、同社が作成したビニール袋の開封装置で、手にハンデのある人にとっては、大きく業務効率が高まるだけでなく、従業員の尊厳を守ることに繋がっている。

午後は京都大学を訪れた。先生方の話によると、京都大学は自由な学風と革新の精神で有名であるとのことであった。京都大学は中国国内の大学とは異なっていて、先生が述べた学校の唯一の任務は教育であるという言葉には感慨を覚えた。中国国内の大学では昇進評定等による一定の功利性が存在している。しかし、教師の本業は人を育

てることであることは、中国であれ、日本であれ同じである。それから京都大学の学生は権威や権力といったものに反対し、外部の権力が学校内に入ることを許していないが、こうしたやり方が正しいかどうかについては分からない。ここからは京都大学の学生との交流内容について話したいと思う。彼らとの交流のテーマは多文化共生であった。まずは自己紹介からで、皆は初対面ということで多少の硬さがあったが、その後交流をしていくうちに雰囲気も和らいだ。討論内容の発表は私と雄蔵が一緒に行った。定義、日本の原住民、移民、そして移民が変えられる面と変えられない面などから最終的に、広い心を持ち、他人を思いやり、理解し、多文化社会を構築していく必要があるという結論を導いた。京都大学での交流が終わった後、雄蔵とメールのやりとりをした。私は日本の大学生との交流は今後より増え、さらに深まっていくと確信している。また私自身としても日中友好の懸け橋となることを願っている。

**日 付： 6月1日 (木) 3日目**

**大学名： 清華大学**

**氏 名： 顧欣宇**

この日、私たちは一日文化視察を行った。

まず私たちは京都の郊外にある嵐山に向かった。嵐山は標高382メートル、桜と紅葉で名高く、南東側には桂離宮という有名な景勝地がある。この日私たちは周恩来記念碑の見学のために嵐山を訪れた。この詩碑は1979年に日中平和友好条約の締結を記念して日本の周恩来総理記念詩碑建立委員会により建てられた。詩碑には廖承志氏(中日友好協会初代主席)の揮毫による周恩来総理が1919年4月5日に嵐山を訪れて詠んだ『雨中嵐山』の詩が刻まれており、詩の中の「追求すればするほど、分からなくなってくる。」の一文はとても印象深かった。周総理の純真な心に私はとても感動し、私も周総理のように天下のため志を立て、平民のため天命を全うし、聖人のため孔孟の教えを継続し、万世のため太平を構築したいと思った。

次いで私たちは高台寺で座禅を体験した。高台寺は北政所という女性が建立した寺院である。北政所は豊臣秀吉の正室で、豊臣秀吉の死去後に出家をし、夫であった秀吉の冥福を祈るために高台寺は開かれた。座禅の後私たちは続いて茶道を体験した。日本の茶道は茶器や茶の点て方など中国のそれとはまったく異なっていた。昼食の後、私たちは新幹線で小田原に到着し、その後箱根湯本温泉のホテルに到着した。私にとって初めての温泉体験でとても素晴らしかった。

今日一日の文化視察を終えて、最も印象深かったのは日本の素晴らしい風景ときれいな環境であった。嵐山に足を踏み入れるとすぐ目に映ったのは「西塞山前白鷺飛び、桃花流水厥魚肥ゆ」の景色であった。箱根温泉エリアに入ると、そこは至るところに滝が見え、滝の飛沫があがっていた。日本の人々にとってのありきたりな山紫水明の素晴らしい景色は、私たちにとってのありきたりな汚染された空気と同じ存在だと思った。私は中国にも環境に優しい資源の無駄のない社会が構築される日が来ることを願っている。

**日 付： 6月1日 (木) 3日目**

**大学名： 中国人民大学**

**氏 名： 陳子鑫**

この日のスケジュールは比較的楽で、主に京都の自然風景の見学と座禅と茶道そして温泉体験であった。午前、私たちは嵐山を訪れ周恩来記念碑を見学した。記念碑には周総理が若かりし頃に詠んだ詩が刻まれており、周総理の学問を修める上での苦労や迷い、そして決心が示されていた。嵐山の風景は素晴らしく、更には多くの寺院もあった。時間の関係で簡単に見るだけで終わったが、今後機会があったらまた見学に來たいと思う。

その後、私たちは高台寺での座禅と茶道体験となった。私の経験上、座禅とは自分の呼吸に集中することで心を静めることであり、座禅の形へのこだわりはない。大師は、休憩時、または車や人を待っている時など、呼吸に集中し「丹

田」により呼吸を調整することで心を静めることができると言っていた。そして茶道を体験した。茶を点てる過程には多くの細かな動作があり、訪日団の学生もこの点について質問をした。私はこうした動作には主に主人の客人への敬意が示されており、客人に快適さを感じてもらうために行っているのだと思う。日常生活においてはここまで細やかなことをする必要はないと思うが、常に他者を思いやり、自分の誠意を感じてもらおうべきだと思う。

その後、私たちは新幹線移動となり、箱根温泉のホテルに到着した。中国とは異なり、日本の温泉では身体を洗った後で温泉に浸かる。また髪の毛やタオルなども浸けてはならない。これには日本人にとっての温泉の大切さが表れていた。これは一国の文化における特徴であり、ソフトパワーであると言えるかも知れない。

**日 付： 6月1日 (木) 3日目**

**大学名： 对外経済貿易大学**

**氏 名： 冨一萱**

今、箱根温泉のホテルの部屋でこの日の日記を書いている。髪の毛にはまだ温泉に浸かった際のシャンプーの香りが残っていて、頭にもまだ少し幸せなのぼせが残っていた。

朝、京都のホテルを出発し嵐山に向かった。茶色の窓ガラスのバスに乗ったこともあり、透明な景色だったものが、多少どんよりと見えた。そのため嵐山に着くとサングラスもかけずにそのまま車を降りた。日差しは強かったものの、幸い風が心地良かった。周恩来総理の詩碑を見学した後、私たちは多くの修学旅行生が通る道に沿ってバスにもどり、高台寺での座禅と茶道体験に向かった。

座禅は本当に全身をリラックスさせ、脳を解放させるものである。住職が言うように、普段の生活においてわずか数分間で緊張をほぐすものなので、毎日長い時間行う必要はない。茶道は私自身とても好きで、これまでは北京で裏千家茶道の交流会に参加したことがあるだけだったが、今回初めて寺院での本場の日本茶道を体験することができた。日本の茶道を愛好してきた私は、茶道体験の後に、なんと住職から茶道を習ったことはありますかと質問された。住職が言うには、私のお礼の際の姿勢がとても素晴らしかったとのことであった。これには本当に感激し、アイドルから外見を褒められるような嬉しさがあった。

京都駅はとても大きく、人もとても多かった。またさらに修学旅行の季節であったため、多くの日本の修学旅行生を見かけた。新幹線の車内はとても広く、整然と管理がされていた。日本人のこうした精神にはとても感心してしまう。

夕刻に小田原で新幹線を降り、その後箱根湯本の天成園ホテルに到着した。このホテルの景色はとても素晴らしく、山間にあり、前方には小川、後方には滝があり、夜に温泉に浸かった際、山間から吹き付ける風は本当に心地良かった。夕食の際、私たちは出し物を披露し、皆もさらに打ち解けた。一緒に歌を歌ったりゲームをしたりしながら、清華大学の学生も思っていたほどクールで真面目というわけではないと思った(笑)。

明日の旅と見学を楽しみにしている。おやすみ！

(この時窓の外から風に乗って花の良い香りが漂ってきた) 6.1 23:20

**日 付： 6月1日 (木) 3日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 艾倍兆**

渡月橋の下を流れる桂川の水は澄み、魚が泳ぐ様子をはっきりと見ることができる。当時の龜山上皇が「くまなき月の渡るに似る」と詠った光景は見ることにはできないが、それでも見渡す限りとても素晴らしい景色であった。

周恩来総理は1919年に嵐山を訪れ、「雨中嵐山」の詩を残した。この日私たち一行は同じように嵐山を登った。霧雨はなかったが、それでも青年特有の情熱と活力、祖国や人々のために戦うという向上心に似た気持ちを持っていた。周総理の「人の世の真理を追求すればするほど、分からなくなってくる。ぼんやりとしたその中に、偶然の一つだ

けの光明を見いだした時、本当に増々艶やかに感じられる」の言葉は、私たちに方向性を示すものであった。

高台寺での座禅と茶道の体験は私たちと日本の文化との距離をさらに縮めてくれた。大師からは、こうした座禅や茶道の文化は当初中国から日本に伝えられ、日本で継承また進化したものであるとお話があった。また私たちが中国で普及が途絶えた、ひいては無くなった文化を改めて中国に持ち帰ることを願っているともお話されていた。こうした文化への理解と許容、そして世界的視野には頭の下がる思いであった。茶道の体験では、他の学生に譲ったので、その学生からお礼として自ら点てた抹茶をもらい、とても感動した。また私たちの入った茶室は木造ですでに400年余りの歴史があるが、今日まで非常に良く保存されている。日本の多くの建築物は100年以上の歴史を持っているが、一方中国ではこうした「古い」建築物は数えるほどしかなく、とても残念である。古くからの文化や建築物の伝承には人々や政府の努力が必要であり、中国はこうした面でまだまだ不十分である。

夜は箱根で楽しく温泉を堪能した。さらさらと流れる水の音を聴きながら、山間の涼しい風を浴び、リラックスして温泉に浸かれることは得難い幸せであった。

この夜はまた訪日団の6大学の学生がそれぞれ出し物を披露した。私たちが出し物を披露する前、浴衣の帯の結び方で苦戦していたところ、従業員の方の手助けを受けた(その方の名前は忘れてしまったが、その優しい表情はきっと忘れなと思う)。席上、各大学の代表者が先生方にお酒をすすめていたが、先生方の食事の妨げにならなかったであろうか。本当に申し訳なかった。

**日 付： 6月1日 (木) 3日目**

**大学名： 北京郵電大学**

**氏 名： 汪佳偉**

この日は比較的楽なスケジュールであった。前日まで慌ただしく見学に出発していたのと異なり、ゆっくりと朝食を済ませた後、この日の最初の目的地である嵐山に向かった。嵐山の景色はとても素晴らしく、皆は足を止めて写真を撮っていた。おしゃべりをしながら風景を堪能し、そうしているうちに周恩来記念碑に到着した。そこには周総理が嵐山を訪れた際に詠んだ詩が刻まれていて、皆はそれを朗読した。その当時からすでに時間は経過しているが、この詩からは祖国の復興への強い願いを感じることができた。その後私たちは高台寺で座禅と茶道を体験した。大師の指導の下、私たちは座禅を始めた。わずか10分ほどであったが、初めての座禅体験であった私にとってはとても難しいものがあった。そして二度目はさらに難度の高い足を組む姿勢であった。そのため開始から1分ほどで足が痺れてきたが、それでも最後までやり遂げた。その後は茶道体験となった。茶道については一定の知識があったが、なぜお茶を飲む際に茶碗を回すのかについてはこれまで分からなかった。そして今回説明を受けて、茶碗の一番きれいな部分をもてなす側に見せるためであったことを知った。昼食を終えた私たちは新幹線で小田原に向け出発し、その後バスに乗り換えて箱根温泉のホテルに到着した。ホテルでの夕食の際は、各大学がそれぞれ事前に準備していた出し物を披露した。こうしたイベントを通じて私たちはさらに打ち解けることができた。その後温泉を堪能した。温泉の効果で今夜は良く眠れるよう願っている。

**日 付： 6月1日 (木) 3日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 原露恬**

京都の近郊にある嵐山、この詩趣に富む名前は、周恩来総理との繋がりを運命づけられていたのかも知れない。青年時代、周総理は救国の道を探し、日本を訪れていた。その際嵐山を訪れ、帰国前の1919年4月5日に再度嵐山を訪れ、「雨中嵐山」の詩を読んだ。この嵐山で「雨中嵐山」の詩を皆で朗読すると、周総理の当時の祖国への情熱と真理を追い求める思いを感じることができた。「中華の復興のために学問を修める」その言葉が改めて脳裏を駆け巡



った。嵐山のこの詩碑は、日中友好の象徴となっている。

その後私たちは座禅と茶道を体験した。これらは中国から日本に伝えられたもので、日本で進化して現在に至っている。座禅と茶道は主に穏やかな心を私たちに伝えたいのだと思った。現代のこの変化のスピードが速く、誘惑の多い社会において、多くの若者は落ち着いて物事を考えることができない。そうした中、座禅や茶道は礼儀作法を通じて心の内を磨くことができる存在である。また私は幸運にも茶道の作法を体験したが、茶器の洗い方から茶のすくい方、点て方、茶碗の出し方それぞれがとても細やかで、一見繁雑なこれらの所作により心を磨いており、これらの所作を繁雑に感じなくなった時が、茶の真髄を本当の意味で理解したと言えるのだと思った。

午後私たちは新幹線で小田原に到着し、その後箱根に向かった。中国と異なるのは、日本では乗客が並ぶ際にホームと平行に並ぶ、こうすることでホームの幅と建設費用を節約している。また新幹線の出発と到着の時間の正確率も非常に有名である。

夜は各大学の団員と一緒に交流を図り、私たちは交通大学の校歌を歌った。交流会はとても和やかな雰囲気であった。

**日 付： 6月2日（金） 4日目**

**大学名： 中国人民大学**

**氏 名： 秦宇**

箱根での温泉体験を通じて日本のソフトパワーについて知識を深めた私は、日本の人々の「生活を楽しむ」スタイルをととても気に入った。私は正にこうした点こそが、日本の人々の幸福指数と平均寿命がいずれも世界のトップレベルにある理由なのだった。

暫しの車での移動の後、東京都国分寺市にある日立製作所中央研究所に到着した。日立はイノベーションと顧客サービスを志向する企業であり、見学においては2つ印象深い点があった。一つめは、日立は技術人材を重視しており、フェロー制度を設けることで役員待遇を与え、さらに継続的な研究業務をさせていることである。この制度は一方で技術人材の研究における積極性と持続性を確保し、もう一方で従業員が能力や貢献に相応しい待遇を得ることを保証している。二つめは、日立は民間企業として未来を牽引することを目標とし、社会的責任感と時代感覚を有している。これも日本企業に共通する特徴である。

午後に訪れた一橋大学では多くの収穫が得られ、さらに沢山の日本の友人を作ることができた。一橋大学の歴史は古いが、小規模で洗練されている。長年の発展においても自身の方向性を見失わず、変わることなく社会科学や商学、法学のエリートを育成し、日本の社会に新たな活力を届けている。現代社会にあって、一橋大学のような存在は稀である。大多数の大学は発展の過程において名声や地位のため次第に自身の方向性を見失う場合が多い。この点について、一橋大学は学ぶべき手本だと思う。

**日 付： 6月2日（金） 4日目**

**大学名： 对外経済貿易大学**

**氏 名： 李黛雅**

朝、箱根を出発し、日立製作所中央研究所に向かった。道中ではかすかに富士山の姿を見ることができた。

日立製作所中央研究所に到着し、バスで敷地内に入るとその様子にとっても驚いた。私は研究所というのは現代的で味気のない建物で、研究スタッフがいつも同じような研究をしているものだと思っていたが、ここでは木々が鬱蒼と茂っていた。また東京のような地価の高い場所にありながら、広い敷地面積の他、緑化が行き届いており、心を落ち着けて仕事ができる環境だと思った。研究スタッフからの紹介の際、印象深かったのは同研究所の石英ガラスによるデータ保存技術で、3億年のデータ保存が可能とのことにとっても驚いた。これにはつい3億年後の人々が3億年前の物を

手にする情景を想像し、とても不思議な感じがした。この技術は伝承と普及におけるイノベーションであり、研究スタッフの発想や知恵というものに感心してしまった。

もう一つの印象深かった技術はTTS技術、つまり音声合成システムであった。この技術の通訳関連における発展と応用に、私は非主流言語人材の将来性について考えさせられ、同時にこれまで以上に自分の専攻学問をしっかり究めなければならないと感じた。

午後は一橋大学を訪れた。対外経済貿易大学で日本語を専攻する多くの先輩方は一橋大学で修士課程を学んでおり、一橋大学の商学部の名声についても早くから聞いていた。講堂や図書館を見学し、非常に特徴のある建物だと思った。また図書館内の自習スペースが個人的にとっても気に入った。机は木製でそれぞれが単独になっていて、机の上にはデスクライトが備え付けられていた。私はここで読書をするのはとても幸せなことだと思った。

この他、一橋大学の学生との交流では、同大学の魅力と姿を感じることができた。夕刻の懇親会では、会場から富士山の姿を眺めることができ、今日の朝しっかり富士山を見られなかった残念な思いが払拭された。

夜ホテルに戻り、部屋の窓から遠くを眺めると、東京タワーを見ることができた。一年前の夢が今こうして実現したのである。人生というのは面白いもので、次の瞬間には誰と会うか分からず、またどんな素晴らしい出来事が起こるか分からないのである。

**日 付： 6月2日（金） 4日目**

**大学名： 北京郵電大学**

**氏 名： 李美婷**

朝早くに天成園ホテルを出発した。昨日は夜10時頃に温泉に浸かった。初めての温泉で身体と心もリフレッシュできたおかげで、昨日の夜はとても良く眠れた。午前中は日立製作所中央研究所を見学した。最先端の技術、イノベーションの発想、人間本位のデザイン、素晴らしい企業制度といったものが私の日立に対する印象であった。同社の音声合成技術には驚かされた。さらに中国人がその中で勤務をしていることに多くの感慨を覚えた。日立はスタッフに静かな業務環境を提供しているが、これは現在の中国企業では真似のできないものだと思った。中国の研究所の多くは市の中心部といった比較的賑やかな場所にあり、森林率も日本よりはるかに低い。日立は10年、20年後の社会の発展に力を入れており、石英ガラスによるデータ保存技術にはとても感動した。人は現在に生きるだけでなく、将来に目を向ける必要がある。これこそ日立が私にもたらした感慨である。同社が厳しい市場競争の中発展を続けているのは、正にこうした長期的目線によるものだと思う。

午後は一橋大学の学生との交流であった。私はまた、何処にいても中国人の姿を見ることができものだと思った。異国の地で旧友に会うというのはオーバーかもしれないが、中国人留学生からもてなしを受けた際はやはり嬉しいものがあつた。欧風の建物、人文的雰囲気にもちれた学校というのが私の一橋大学についての印象であった。また私は、激しく照りつける太陽の下、ある一橋大学の学生がベンチに座り一心不乱に読書をしているのを見かけた。ベンチは木陰がなく、陽射しを直に浴びていた。これには一橋大学の学生の知識欲と集中力を見ることができた。討論のテーマは日中の婚姻状況であった。私たちのグループは日中の婚姻における共通点と相違点の比較から討論を行い、教育レベルの向上や経済的な自立に伴い、日中の婚姻問題には同じような変化が起きているという結論に至った。例えば離婚率の上昇などの現象は年々大きな問題となっている。それから私自身ずっと疑問に思っている問題がある。スマートフォンが発達している今日にあって、なぜ日本で使われている携帯電話のタイプがこれほど異なっているのだろうか。京都大学の多くの学生はいまだにガラケーを使っている、一部には旧式の携帯電話を使っている学生もいた。一方一橋大学では多くの学生が 아이폰 を使っていた。

ホテルに戻った後、改めて外を散策した。東京と京都ではやはり大きな違いがあつた。古典的で静かな京都、賑やかな東京、いずれにしても私に多くの物事を体験すべきであることを教えてくれている。

**日 付： 6月2日（金） 4日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 趙政**

日立という企業の名声についてはかねてから耳にしていた。今日その研究所の見学ができたのはとても嬉しかった。中国の多くの公共スペースにおけるエレベーターなどは日立の製作によるもので、信頼性と安全性を最も重視している。研究所に足を踏み入ると、まず整然とした印象を受けた。余計な宣伝や紹介といったものがなく、その整然とした雰囲気はまるで巨大な実験室を思わせた。私たちは6階に上がり、そこで遼寧省出身の研究スタッフからTTSシステムについての紹介を受けた。このシステムは生活のあらゆる場面に応用ができ、言語の違う人同士の交流が可能で、2020年の東京オリンピックでも応用される予定である。その後私たちは同研究所の展示ホールに案内され、そこで3億年のデータ保存が可能で石英ガラスを見かけた。レーザーを使いガラスに情報又はQRコードを100層記録することができる。また表情認識と瞳孔認識において起こる可能性のある問題を克服した第四世代身分証である静脈識別システムも目にすることができ、とても視野が広がった。

昼食の後、私たちは「アジアのハーバード」と呼ばれる一橋大学を訪れた。唯美的なキャンパス、荘厳な講堂、広くて明るい図書館、大きなキャンパス、少人数制、教育資源の豊富さ、学生が自分の趣味に時間を割くことができることに羨ましさを感じた。討論の際私たちは積極的に発言し、意見を交換し合った。各大学にはそれぞれ個性があり、京都大学と比べ、一橋大学の学生はより中国の観念に近い印象を受けた。討論結果の発表の際は、「小異を残して、大同を求める」原則に基づき発表を行った。その後、皆は懇親会で色々な話題について語り合い、互いに親睦を深めた。同年代の人間同士の交流はとても楽しく、お別れの際は名残惜しいものがあつたが、多くの収穫が得られた。

**日 付： 6月3日（土） 5日目**

**大学名： 清華大学**

**氏 名： 王德標**

朝、40階のレストランでの朝食の際、無意識に都内を一望できる席を選んでみた。またそこからは遠くに富士山の姿を見ることができた。この幸運は、これから先私に楽しい時間が待っていることを告げているかのようであった。

午前9時過ぎ、私のホストファミリーのYuさんとその彼氏であるHiroさんがホテルまで私を迎えに来てくれた。こうしてこの日の活動が始まった。私は日本の大学にとっても興味があつたので、まず初めに東京大学を訪れた。Hiroさんは東京大学の卒業生で、彼から東京大学の歴史や建物などについて詳しく教えてもらい、さらに彼が当時学んでいた場所に足を運び、当時の学校生活などについての話を聞いた。とても楽しい時間であった。

昼食の際、Yuさんはこの近くに動物園があつて、そこにはとても可愛いジャイアントパンダがいると教えてくれたので、食事の後私たちはパンダを見に動物園へ行った。のんびりとしたパンダは遠くから会いに来た私を見ても挨拶することなく、気ままに遊んでいた。それでも無邪気なパンダの様子はとても面白かつた。

その後、私たちは東京駅と銀座駅を訪れ様々な建築物を見て回った。Yuさんは私が土木を学んでいて建築物に興味があることを知っていた。そのため、わざわざこの古典的ながらも現代的な2カ所を案内してくれたのである。この見学では知識を増やせただけでなく、建築物への理解も増やすことができた。とても収穫の多い午後であった。

銀座駅での見学を終えた後、私たちは地下鉄でYuさんのご両親のお宅へと向かった。彼らは東京の近郊に住んでおり、とても閑静なところで悠々自適な生活をされていた。Yuさんのご両親は丁寧に私を迎えてくれて、わざわざ夕食も準備されていた。夕食の後、私はYuさんのお父さんと日本の宗教信仰について語り合った。印象深かつたのは、Yuさんのお父さんからの、日本人は一般的に複数の神を信仰していて、信仰は個人の問題で他人とは関係がない。世界に一つの神しか存在しないという考えになつた場合、自分が信仰する神こそが本当の神だと考えてしまい、その際に色々な危険が生まれるというお話であつた。また神への信仰というものは主に畏敬の心を持つことであり、正しいことをするという事だということだというお話もされていた。この交流は自分にとって沢山の収穫があつた。

**日 付： 6月3日（土） 5日目**

**大学名： 中国人民大学**

**氏 名： 姜雨荷**

Homestay day！今日は待ちに待った「養子となる日」で、私たちはそれぞれ日本の一般家庭でのホームステイ体験をすることとなった。

私は北島厚次さんとそのご家族のお宅でのホームステイとなった。北島さんと奥さんはとても親切な方で、英語での交流は多少苦勞したが、それでもとても楽しい一日であった。夕食時、北島さんは彼の中国人の同僚である成さんを招き、その場の雰囲気も和らいだ。そして彼女の説明により、私は北島さんが定年後に再度会社から招聘された非常に優秀な保健学の博士であることを知った。また北島さんは環境問題の研究を続けており、豊富な環境面の知識を持っていた。北島さんと成さんのお話から、私は自分の研究テーマである生活ごみの根本からの分類と資源回収における日本のごみ分類の成功経験に関する知識について多くの理解が得られた。日本のごみ分類は現在、燃えるごみ、燃えないごみ、アルミ製品、ペットボトル、缶そして粗大ごみの6つに大きく分かれており、中国での分類よりも細かく、また定着していることを知った。その後私は北島さんに中国国内の生活ごみの分類についての見解を尋ねた。北島さんからは、中国において十分な生活ごみの分類がされるには少なくともあと10年から20年の時間が必要であろう。生活ごみの分類やその知識に関する教育も初めから全国に普及させることは難しく、沿海地区の比較的発展した都市から始めるなど、急がば回れの姿勢で行うべきで、中国における環境保全の道は遠いものがあるとお話であった。

北島さんと奥さんはまた普段の仕事や生活以外に、写真撮影や料理、ガーデニングなど生活に様々な彩りをもたらしていて、洗練された生活をされていた。この日はとても充実した一日であった。

**日 付： 6月3日（土） 5日目**

**大学名： 对外経済貿易大学**

**氏 名： 張元浩**

ホームステイの初日、初めはとても緊張していた。

直美ちゃんは事前に夫婦の写真を送ってくれていたが、内心では実際に対面する際に見分けることができず気まぐずい空気になるのではないかと不安だった。しかし幸い二人は早くに私を迎えに来てくれ、私自身もはっきり見分けることができた。初対面の直美ちゃんはとてもフレンドリーで早速一緒に写真を撮った。ホストファミリーという心理的暗示と二人の親しみやすさから、私にはある種の自宅に戻ったという感覚が生まれた。

その後しげちゃんは一足先に帰宅し、直美ちゃんは私を明治神宮に連れて行ってってくれた。明治神宮は初めてだったので付近一帯の状況についてはとても目新しく感じたが、多くの場所が閉館になっていて多少残念であった。

この日全体を通して直美ちゃんはとても親切で、常に私を気遣ってくれていた。日本人のマナーはとても素晴らしく、いつでもどこでも彼らは礼儀正しい。それに対して中国国内では未だ多くの人の素養は高いとは言えない。これは教育の問題だけではなく、社会全体の問題である。今後こうしたマナーの良さが中国国内で広まっていくことを願っている。

**日 付： 6月3日（土） 5日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 何雨婷**

今日から2日間のホームステイが始まった。

今から1ヵ月前、ホストファザーの佐藤さんがメールで私に連絡をくれて、その際にこの2日間のスケジュールについては大体決めていた。朝早くに起きて身支度を整えて、会場で佐藤さんの到着を待った。佐藤さんとその同僚の小泉

さんは、今回それぞれ私と徐さんのホストファミリーを務めていた。二人は同僚でまた都合よく同じマンションに住んでいた。そのため二人はそれぞれお子さんを連れて私たちを迎えに来た。

またこの時ちょっとしたエピソードがあった。私は佐藤さんのお子さんの名前を聞いた時、佐藤さんから息子さんは友成(佐藤さんの名前は友孝)という名前だと聞いた。親子の名前で同じ「友」の字が使われていたのである。中国では一般に名前に同じ漢字が有る場合は兄弟関係である場合が多い。これも日中のちょっとした違いだと思った。

スケジュールでは、今日は佐藤さんの勤める会社で半年に一度開かれるバーベキューパーティーに参加することになっていた。会場への到着が少し遅れたため、皆はすでに役割分担を済ませて作業を始めていた。自分も普段家族と野外でバーベキューをすることがあるが、この日の会場はとあるホテルの裏庭で、賑やかで交通も便利な場所であった。バーベキューの材料は皆さんが持参したものだ。魚介類が豊富な日本、ここではバーベキューの材料にも多くの魚介類があった。その後皆は食事をしながらおしゃべりをした。この日は多くの社員の家族も来ていて特に多くのお子さんを見かけた。また私たちは二人の香港出身の方と知り合った。またおしゃべりを通じて、社員の多くは大学時代に多少中国語を学んだことがあることを知った。バーベキューパーティーが終わり、皆で後片付けをして記念写真を撮った後、ある社員が今回のパーティーのために実家の北海道から魚介類を取り寄せたり、ワインを持って来たり、美味しいチーズケーキを持って来たりした社員の方々にお礼を述べていたのを見かけた。

この日の夜は、ホストファミリーが中華料理を食べに連れていってくれた。料理店の主人は中国人で、味付けも中国のそれと近かった。量が多いというわけではなかったが、皆はとても美味しくいただいた。夕食の後、私たちは100円ショップを見て回った。ここは中国の2元ショップとは全く異なり、商品が整然と陳列され、種類も非常に多かった。こうした点も中国が学ぶべきところだと思った。

**日 付： 6月3日 (土) 5日目**

**大学名： 北京郵電大学**

**氏 名： 王芙蓉**

私たちに日本の一般的な家庭生活をより良く知ってもらうため、今回私たちには2日間のホームステイが組まれていた。

初めにスケジュールを貰った時から今回のホームステイを楽しみにしていたが、それと同時に自分の日本語が下手なせいでうまく交流できないのではないかと多少の緊張もあった。心の中で様々な想像をしながら私は小倉さんそして奥さんと対面した。小倉さんは私の父親と同年代であったが、感覚的には父親と言うよりかはお兄さんといった感じがした。小倉さんは私が荷物を手にしているのを見て、すぐにその荷物を代わりに持ってくれた。道路を横断するときや地下鉄に乗る際は常に私をかばい、とても良くしてくれた。また私が初来日ということを知っていたので、地下鉄の駅では私のために乗車用のカードを作り、さらに運賃までチャージしてくれた。人が多い時は私を見失わないようお二人はいつも私を二人の間に立たせてくれた。また日本の地下鉄は中国同様人が多いが、空席がある時はいつも私を先に座らせてくれた。そしていつも笑顔で私と大学生活や仕事や勉強の話などをしてくれた。

午前、私たちは浅草の雷門を訪れた。そこには大きな赤い提灯があった。私は「これは夜には光りますか？」と訊ねたところ、小倉さんはすぐに夜の様子の写真を探し、光らないと教えてくれた。浅草寺に続く路地の両側には沢山の小さな店舗が軒を連ねていた。週末で人が多かったが、笑顔で一軒一軒私に付き添い、さらにこれらのシンボルに込められた意味合いなどを私に教えてくれた。浅草寺に到着した後、私たちはまず手を洗い、その後香を持ち、日本の方式でお参りをした。浅草見学の後は築地を訪れた。築地には大きな市場があり、そこではこれまで見たことがない魚を沢山見かけた。市場の見学の後12時近くになって私たちは築地の小さなお店で昼食となった。お店の面積こそ小さかったが、料理はとても手が込んでいて、魚もとても新鮮で美味しかった。それから私たちは銀座を訪れた。銀座はショッピングの聖地であるが、その多くは贅沢品であるため、小倉さんは学生向きのお店に連れて行ってくれた。そして私が買い物をしている間、小倉さんは外で私を待っていてくれた。

銀座を見学した後、小倉さんは私が歩き疲れたと感じたのか、私を連れて帰宅し、私にゆっくりと休憩を取らせてくれた。

**日付：6月3日（土）5日目**

**大学名：北京交通大学**

**氏名：趙政**

今日はホームステイの日で、皆はロビーからそれぞれのホストファミリーとともに出発していった。私のホストファミリーには二人の可愛い男の子がいて、彼らと一緒に私たちは日本的風情のある鎌倉、八幡宮を見学した。日本の人々のマナーへの重視度合には驚くべきものがあり、ホストファザーやホストマザーは常に子供たちに、神社や寺院の参拝前には清潔にすることやお参りの際のルールなどについて話をしていた。午後私たちはホストファミリーのお宅に戻り、二人のお子さんはスイミングスクールでの授業に出かけた。ここで私が驚いたのは、わずか6歳と9歳の男の子が自分たちだけで自宅から離れた場所に授業を受けに行くのに、ご両親は全く心配していないことであった。「独立」と「マナー」の二つはお子さんたちに余すところなく表れていた。私たちは車で現地のオリンピックというスーパーマーケットを訪れた。三階はリサイクルエリアで、多くのリサイクル商品が売られていて、靴や洋服、鞆、書籍等リサイクル可能な商品が整然と陳列されていた。こうした環境保全意識はすばらしいものだと思った。

夕食はホストファミリーと一緒に餃子を作った。異国の地で餃子を食べるのはまた違った趣がある。英語での交流も想像していたよりスムーズで、ホストファザーは今英語を猛勉強中とのことで、今後博士号を取得したいとのことであった。40歳近くになっても学習を続けていることに私はとても感心させられた。またお子さん二人も自発的に勉強をされており、夕食後から就寝前までは本を読んでいた。この年代はアニメを観たりゲームをしたりするものではないのだろうか、私はとても意外に感じた。

自分の部屋に戻り寝る準備をしていると、隣の部屋からホストファザーが英単語の勉強をしている声が聞こえた。彼もまた寝る前に30分ほど英語を勉強しているという話をしていた。これには私自身も語学レベルを高めなければならないと思った。

**日付：6月4日（日）6日目**

**大学名：清華大学**

**氏名：韓儲銀**

あっという間に6日目となり、この日もホストファミリーの柘植さんたちと過ごした。昨晩は初めて畳の上で寝たが、とても気持ち良かったため、朝起きるのが少し遅くなってしまった。

朝、柘植さんたちと一緒に車で観音廟を訪れた。日本の文化の多くは中国ととても似ていることに気が付いた。日本の書道、仏像、寺院、建築、スタイル等は当時中国から伝わったものであり、日本において中国が失った文化を再発見できたことは、私たちに優れた伝統文化を保護することの重要性を教えてくれたかのようであった。

しかしながら中国にも誇るべきところが存在する。柘植さんの自宅から東京に行く際は全長10kmの海底トンネルを通過するが、中国は現在全長50kmの世界で最も長い海上橋である港珠澳大橋を建設中だと伝えたところとても驚いていた。また中国の高速鉄道の運営距離がすでに世界全体の半数以上を占めていると伝えると、同様にとても驚いていた。ホストマザーは25年前に北京を訪れたことがあり、その時の印象では北京は街中自転車だらけだったとのことであったが、私が現在は北京の地下鉄の一日の利用者数は1000万人以上だと伝えたところ、彼女は「oh, it has changed totally」とコメントした。中国はとても速いスピードで発展しており、ますます強い国になっている。これが私たちの底力であり、また自信の源である。その一方で、日本の人々の中国への理解は未だ不足しており、私たちは日本に学び日本を知る以外にも、日中交流の架け橋となり中国の状況を紹介し、中国の声を届けていく必要がある。

日 付：6月4日（日）6日目

大学名：中国人民大学

氏 名：李雅嫻

朝食の後、私たちは渋谷のプラネタリウムへ向かった。昨夜、私はホストファミリーの西山さん夫婦とおしゃべりで自分の天文への興味について話をした。そのためこの日はプラネタリウムに行くことにした。地下鉄での移動の際は道程こそ長かったが、期待が薄れることはなかった。私は北京のプラネタリウムの常連であるため、ドームスクリーン映像を見た時には特に興奮してしまった。ここでは北京とは異なり、スタッフが現場で直接解説をしており、より臨場感があった。また多くの人が観賞していて印象深かった。

秋葉原はアニメグッズの聖地で、多くのアニメグッズや家電量販店があり、私もその評判を聞きつけやって来た。予想通り、多くの人が買い物をしていて、中国人観光客の他、中国人店員の姿も見かけた。これには日中両国の経済的交流が見て取れた他、日本のアニメ産業の発展の勢いを感じることができた。アニメは若者間における絶好の交流スタイルと言える文化である。中国のアニメ産業は発展途上にあり、文化の継承や普及については日本には及ばない。現在中国は急速に発展しているが、ソフトパワーについては今後更なる向上が必要であるのは否めない。アニメはソフトパワーにおける一つの側面に過ぎず、座禅、茶道、古詩といった伝統的文化についても継承・発展していくべきだが、残念ながらこれらの優れた文化はそれに相応しい扱いを受けていない。

より明確に対比できるのは、和服と漢服の継承である。日本ではどこでも和服姿の人を見かけるが、もし中国で漢服を着た場合、周りの人から好奇の目を向けられる。漢服は中国伝統の服装であり、独特の美的センスと技法を含んでいる。幸いにも中国は現在それらの保護と発展への対策を講じており、今後中国のソフトパワーも新たなレベルに到達できるものと確信している。

日 付：6月4日（日）6日目

大学名：對外經濟貿易大学

氏 名：林子惠

朝はホストファミリーのお宅で朝食を取った。お姉さんは早くに起きて私のために純和式の朝食を作ってくれた。常々その名前を聞いていた納豆を初めて食べた。ご飯に混ぜて食べると、意外なほど美味しかった。食後私たちは近所でお土産を買った。お兄さんやお姉さんはスキンケアマスクやハンドクリームを買い私にプレゼントしてくれた。これには心がとても温かくなった。その後午前中はホストファミリーのお宅で3歳のお子さんと一緒に遊んだ。わずか1日しか経っていないのに、彼女はもう私と仲良くなり、常にお姉ちゃんと呼びながら、気に入っている玩具を私に見せてくれた。私にもこのような妹がいたらどんなに嬉しいことだろうか。昼食もホストファミリーのお宅で食べたのだが、訪日前私はメールでカレーが食べたいとの話をしていたのを覚えていたお姉さんがわざわざカレーを作ってくれたのである。皆さんとても優しい人である。

午後は一家全員で水族館に向かった。週末ということで人は多く、ピクニックをしている人や自転車に乗っている人もいたが、地面にはごみ一つなく、至るところがきれいであった。こうした点は中国人がしっかり学ぶべきものだと思う。それでも今後中国がさらに発展し、一般市民の素養も日本人のように良くなっていくと信じている。水族館では日本特有の魚を沢山見かけた。またそれらの多くは食用とのことである。マグロについてはこれまで中国では食べたことがあったが、マグロ自体がこれほど大きい魚だとは思っても寄らなかった。それ以外にも沢山の印象深いものを発見した。水族館を出るとホテルに戻る時間となった。お兄さんが運転する車でホテルに戻るまでの間、私たちは色々とおしゃべりをした。とても名残惜しかった。人生には本当にたくさんの一期一会がある。だからこそ何をするにもそれを楽しむことが必要なのである。

夜は団員らと新宿に行き、東京の華やかさを目にした。北京の三里屯に少し似ていると思ったが、私個人としてはやはり古風な街並みの方が好みである。現代的な街並みも好きな人は大勢いるだろうが、街に歴史的な建物がなけ

れば、どこか文化的な雰囲気足りない感じがする。

**日 付： 6月4日（日） 6日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 郝琦璘**

午後3時40分、「まだ20分あるから東京駅を見に行こう」と入野さんが言った。この時私は本当に感激した。今回のホームステイではとてもお世話になったのに、それでもまだ限られた時間の中で私により多くの体験をさせようとしてくれたのである。そして真美さんも「時間が経つのは早い、もっと色々な体験をさせたかった」と言った。彼らの優しさに私は、彼らともっと一緒にいるために時間がゆっくり流れて欲しいと思った。

異国の地で、入野さん一家は私に家族の優しさを感じさせてくれた。これは中国国内の多くの人にとっての日本人の印象とは異なる、ひいては逆のものであった。確かに中国と同じように、日本人の中にも中国人に良い印象を持っていない人がいる。こうした状況は互いの交流不足がもたらしたものである。

日中両国とも情報への規制はとても厳しく、ニュースやネットだけでは互いの事を知るには不十分である。そこで、両国の民間の交流は特に重要になってくる。今回の活動のような深いレベルでの理解と交流は、両国関係の進展にとって非常に重要である。民間の交流が充分であれば、必然的に相手への印象も変わり、これまでより良くなるかも知れないし、そうはならないかも知れない。いずれにしても様々な角度から見て、知ることができる。これは主観のみに頼り判断するのと同じで、一部の報道や歴史のみで結論を下してはならない。歴史は忘れてはならないが、それだけにとらわれてはだめなのである。さもないと膠着状態になり、自国にとって不利な結果をもたらすことになりかねない。

だからこそ、私は民間交流の重要性をひしひしと感じ、日中友好に貢献するという願いがより強まった。特にこの数日、中日友好協会の方々、日中経済協会の方々から日中友好への努力における達成感を感じることができた。今後私も日中友好の大業に彩りを添えるような何らかの貢献をしたいと思う。

**日 付： 6月4日（日） 6日目**

**大学名： 北京郵電大学**

**氏 名： 都平**

ホストファミリー宅で気持ちの良い一晩を過ごした私はなんとかベッドから起きドアを開けると、ホストファミリーの笑顔とあいさつの言葉で迎えられ、その瞬間心が温かさで感動に包まれた。私は魚介類が苦手ということを考慮し、彼らは普段のお味噌汁ではなく、わざわざハムと野菜のスープを作ってくれた。そしてホストファザーはわざわざ北海道のステーキをサラダにし、さらにパンケーキを焼くなど、完全に私の好みに合わせてくれた。こうした細やかさに、私は彼らのおもてなしの心を感じた。

朝食の後、私はホストマザーと一緒に土産を買いに出かけた。一家で唯一海外を経験した私は家族のためにお土産を買い、彼らの笑顔を想像すると私自身とても嬉しい気持ちになった。ホストマザーは新宿から銀座、銀座から東京駅へと私とあちこちを歩き、日本の文化的特徴などを詳しく紹介してくれた。見るものすべてがとても新鮮であった。そして歩き疲れを心配したホストマザーはわざわざ私をマッサージに連れて行ってってくれた。これには彼らの細やかさと優しさに驚きを禁じ得なかった。日本は完全に儒教の「礼」と「和」を習得していて、さらにその真髄を彼らの日常生活や学習そしてマナーに浸透させている。だからこそこれほど物腰が柔らかく、礼儀正しいのである。そして中国は残念ながら日本ほどそうしたものが継承されていない。中国は失ったものが多すぎて、「社会が失った伝統文化については民間でそれを探さなければならない」という言葉まで存在する。これは中華の文化にとっての悲しい部分である。

マッサージを終え、うどんを食べた後、ホストファミリーは私をホテルまで送り届けてくれた。お別れの際彼らはまた私にプレゼントをくれた。私もまた対面した当初、梅の柄の唐傘と貫入の入った花瓶をプレゼントしていた。私は今回



のホームステイで彼らとここまで親しくなれるとは思っていなかった。今回の体験は一生忘れないだろう。

**日 付： 6月4日（日） 6日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 原露恬**

昨晚お母さんはわざわざ私のためにお兄さんの部屋を片付け、私に好きなタオルを選ばせてくれて、そして就寝前には喉が乾いたら下の階に飲み物があるからと伝えてくれるなど、こうした細やかな心遣いに私は家に帰ったような感覚がした。

この日朝早く、お母さんは私たちを車に乗せ芦ノ湖へ向かった。しかし天気の影響で富士山の姿を見ることができなかったのは残念であった。芦ノ湖は火山活動で形成された火山湖であり、私たちは箱根園所でこの一帯の地形について調べた後、ロープウェイで大涌谷に向かうことにした。しかし桃源台と大涌谷間のロープウェイがこの日丁度メンテナンスのため運航していなかった。それを知ったお母さんはとても申し訳なさそうに、バスで大涌谷に行きそれからロープウェイで早雲山に向かうしかないと教えてくれた。お母さんの申し訳なさそうな表情を見て、この2日間のために彼らがとても念入りに計画をしていたことを改めて感じた私はとても感動した。突発的な事情で予定とは違ったが、それでも私はとても感謝している。私は風景よりも美しい彼らの熱意と優しさを見た思いがした。

大涌谷に近づくと、だんだんと硫黄の匂いがしてきた。鼻を突くというほどではないが、匂いははっきりと分かった。山には霧が立ち上り、大量の湯煙が谷底から噴き上がっていてとても壮観であった。私たちは大涌谷の有名な黒たまごを食べた。温泉で茹でた黒たまごを食べると寿命が7年延びるとのことである。科学的根拠はないものの、これも一種の願掛けに近いものがある。その後私たちは電車で早雲山を下り、勾配を緩和する有名な「スイッチバック式」鉄道を直に体験した。私は娘さんに「スイッチバック式」は詹天佑という人が京張鉄道を建設する際に初めて使ったものだと教えると、彼女は中国と日本には沢山の文化的交流があるといった感想を口にしていた。下山によって時間がかかり、午後4時までにホテルに戻ることができなくなったので、お母さんはわざわざ事前にスタッフに連絡して私を安全に送り届ける旨を説明してくれた。

お別れの際、私は涙を抑えることができなかった。中国での再会を楽しみにしている。

**日 付： 6月5日（月） 7日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 秦諾雅**

時間が経つのは早いもので、あっという間に8日間の旅も残すところあと1日となった。今日は4つの活動と充実したスケジュールで、多くの収穫が得られた。

午前には三井住友銀行の見学、お昼は日比谷公園の松本楼での昼食であった。ウェイターのサービスはとても細やかで、どのスプーンでどのスイーツを食べるかまで教えてくれた。そしてこの日最も大きな収穫が得られたのは午後と夜であった。午後私たちは中国駐日大使館を訪問し、夜は三菱商事の見学と懇親会であった。

午後の大使館では、汪参事官から日中関係における最前線のスタッフの目線から見た両国関係の現状について、現在は改善に向かっているが未だ多くの複雑で敏感な要素が残っていると紹介があった。また汪参事官の言うとおり、私たちは日中関係を正しく客観的にとらえなければならず、少なくとも常軌を逸した行為により政府に迷惑をかけてはならないと思った。実際中国が日本から学ぶべき所は沢山ある。日本の厳格な法律、ハイテクを利用した汚染物質の排出による空の青さ、伝統文化の継承及び他国の優れた文化や技術の応用、日本人の他人へのマナー、優しさ等、これらはいずれも私たちが学ぶべきものであり、私たちがより成長していくための武器である。

その後私たちは三菱商事を訪れた。約1時間、私たちは小山氏による紹介と質疑応答を通じて三菱商事について

一定の理解を得ることができた。その後の懇親会では、私たちは同社の社員の方々との交流を行った。私は同社の採用条件などの面について質問をし、同社は採用時に知識よりも個人の人柄を重視する。人柄とは違い、知識は後で学ぶことができる。そのため重視されるのは自分に長所があるか、そしてそれを伸ばしているか、ボランティアといった社会的な活動に参加をしているか、リーダーシップが有るかどうかといった点であるとの回答を頂いた。そのため、私たち大学生は尚のこと日本の大学生のように、アルバイトや旅行、そして様々な活動に参加をしなければならないと思う。勉強はしなければならないが、勉強に影響のない範囲で自身の社会性を育てる、これこそが中国の教育に欠けているもので、日本に学ぶべき点だと思う。

**日 付： 6月5日（月） 7日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 何雨婷**

この日の私たちのスケジュールはとても詰まっていた。

初めに、私たちは日本屈指の金融機関である三井住友銀行を見学した。そこで驚いたのは、三井と住友はこの三井住友銀行以外の分野ではライバル関係にあるということであった。三井住友銀行の藤盛部長は多忙の中私たちをもてなし、さらに同銀行の長い歴史について紹介を頂いた。また私たちがいずれも翌年または翌々年に卒業を控えていることから、同銀行の中国人社員2名による業務状況の紹介も手配頂いた。初めに紹介があったのは、北京大学で哲学を専攻した女性社員であった。彼女はとても活発で可愛らしく、想像していた日本企業で働く社員の様子とは全く異なっていた。彼女の経験は私にとってとても手本になるもので、将来外国で働くことへの可能性を私にもたらしものであった。そしてスタッフの案内の下、私たちは三井住友銀行のデジタル地球儀そして金融ミュージアムを見学した。デジタル地球儀では世界の船舶・航空運輸等の状況を確認できる他、衛星を介して各国・各地区の街の状況も見る事ができる。金融ミュージアムは一般の博物館とは違い、複数の大きなタッチパネル式の柱があり、文字や写真、映像形式の様々な資料を見ることができた。

次いで、私たち一行は中国大使館を訪れ、暫しの帰国を果たした。私たちを出迎えてくれたのは大使夫人である汪参事官であった。汪参事官からは、現在の駐日大使が2010年2月に着任以降に発生した一連の重要な出来事についての紹介があった。またお話の中では、友好交流課の「民間が先行、民が官を促す」の方針について強調されていた。私は光栄にも学生代表としてスピーチを行い、大学生の交流の角度から一橋大学での討論会について紹介を行った。

そして最後に私たちは三菱商事を訪れた。同社は日本トップクラスの総合商社で、事業範囲が広く、物流や金融以外にも環境保全等の分野においても大きな貢献をしている。三菱はまた中国の各大企業と密接な関係にあり、会社内には多くの中国人社員及び中国語が堪能な日本人社員がいる。紹介を担当された小山氏もまた「中国通」であり、中国語が堪能で、意欲的に学生等と交流をしていた。

今日の3つのスケジュールはいずれも充実したものであり、大使館への訪問では国際情勢についてより明確な理解が得られ、その他2つの大企業では日本企業の国際化における積極的な姿勢について知ることができた。

**日 付： 6月5日（月） 7日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 王紫嫣**

ホストファミリーとお別れをし、これまでの見学の旅が再開した。最終日の前日であるこの日もスケジュールが充実していた。朝早くに三井住友銀行に到着し、その雄大な様を目に収めた。三井住友銀行では様々な業務を展開しており、また長い歴史の中でどんどん新しく変革し、時代の発展や変化の機会を素早く捉え、絶えずサービス分野やサー

ビス範囲を拡大し、自身の優位性と地位を確固たるものにしていく。またハイテクのサポートの下前進を続けており、デジタル地球儀やデジタル図書館のような展示室以外に、同社のマスコットキャラクターにも大きな魅力を感じた。これは子どもという将来の潜在顧客への親しみやすさを考慮したものだった。

その後私たちは近代の日中関係と深い繋がりのある日比谷松本楼での昼食となった。ゲートを開けるとそこには宋慶齡女史が使用していたピアノがあった。松本楼と関係の深い二人の人物といえば、孫中山、梅屋庄吉両氏である。国父と梅屋氏は日頃から仲が良く、彼が当時各地で革命活動を行った際の大部分の資金は、梅屋氏が支援したものである。二人の関係は、現在の日中関係の構図について改めて考えさせられるものであった。

その後、私たちは中国駐日大使館を訪れ、汪参事官から出迎えを受けた。そして参事官からの詳しい紹介により、私たちは本当の意味で現在の日中関係の状況について知ることができた。懸念や明るい材料などあるが、最終的には両国がさらに交流を増やし、誤解や壁を取り除き、世界の安定と繁栄のために共に努力していくことが必要だと言う結論に皆が賛同した。

この日の最後は長きに渡り高い評判を得ている三菱商事への訪問であった。また同社は今回唯一私たちのネームプレートを作ってくれた企業であった。同社の中核事業は私の専攻とも関係があったことから、私はこの機会に様々な質問をした。その後の懇親会では、三菱商事の経営幹部の方とも踏み込んだ交流をすることができた。普段学校では企業の調査研究活動も行われるが、この「走近日企」の活動ほどの便利な条件は整わない。今回の訪日の旅が間もなく終わることに寂しさを感じた。

**日 付： 6月5日（月） 7日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 任二祥**

今日は訪日7日目、スケジュールが最も詰まった、また最も充実した一日であった。この日は日本の三大銀行の一つである三井住友銀行、日本トップクラスの商社である三菱商事、そして中国駐日大使館、日比谷松本楼を見学した。

午前、私たちは三井住友銀行を見学した。100年以上の歴史を持つ世界の10大商業銀行の中の一行として、三井住友銀行は世界に幅広く支店を展開している他、新入社員の研修にも力を入れており、国際化の現在において海外従業員の招聘や育成については日本でも先頭を走っており、会社のグローバル化における基礎構築に貢献している。

お昼は日比谷松本楼を訪れ、豪勢な昼食を堪能した。そして梅屋庄吉氏と孫中山氏の革命時における友情についての話を聞き、とても感動させられた。二人は共通の理想のために助け合い、梅屋氏は「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援す」の誓いを立て、中国の革命のために1300億人民元相当もの資金を投じた。梅屋庄吉氏はまた、孫中山氏の死後に彼の精神を積極的に広め、後の世代に日中の友好を継承するなど両国の友好に一生涯力を尽くしたのである。

その後私たちは一時の「帰国」となる中華人民共和国駐日本国大使館を訪問した。ここでは大使夫人である汪参事官から、ここ10数年における日中関係の発展における困難な道程や参事官自身の日中関係に対する観点についてのお話があり、実際の日中関係は私が想像しているような簡単なものではないこと、そして両国関係のデリケートさと特殊性について知ることができた。

大使館を後にした私たちは、三菱商事を訪れた。三菱商事は日本最大規模の総合商社で、事業範囲が生活のあらゆる面に及んでいることにとっても驚いた。中国ではこれほど大規模の財団はなく、また「商社」という概念の企業も存在しない。「商社」というのは国民生活のあらゆる面に浸透しており、国家経済の命脈を握る存在だと思った。懇親会では同社の中国人従業員と交流した。彼らはここで素晴らしい教育と待遇を受けているとのことで、私自身国際的企業で働くことへの願望がより強くなった。

**日 付： 6月6日（火） 8日目**

**大学名： 清華大学**

**氏 名： 鐘玲**

今日は訪日の最終日。あっという間に8日間が過ぎ、間もなく日本を離れることになる。とても名残惜しい。

朝は私たちが宿泊したホテルであるホテルニューオータニを見学した。同ホテルは東京でも最高クラスのホテルであり、1964年の東京オリンピックに合わせて開業した大型ホテルである。私たちはホテルニューオータニの汚水処理システムを見学した。同ホテルは環境保全の面で非常に進んでおり、毎日発生する約5トンの生ごみの100%再利用を実現している他、活性汚泥方式により厨房で発生する1000トンの排水を浄化し、ホテル内の樹木やローズガーデンの灌漑そしてトイレの洗浄用として活用している。私たちはまた山や魚そして滝のあるホテル内の美しい日本庭園を見学した。

その後歓送会となった。歓送会では訪日団の学生等が今回の訪日への感想を述べた。その感想の内容から、皆は今回日本で多くの収穫が得られ、日本を離れることに名残惜しさを感じているようであった。そして私たちは「和你一樣（あなたと同じ）」を合唱し、今回私たちをもてなしてくれた方々とお別れし、帰国の途に就いた。

今回日本では本当に多くの収穫があった。京都大学と一橋大学では中国のそれとは全く異なる学風を体験し、面白かったと同時に自分の将来設計についても影響をもたらすものであった。と言うのも、私自身今後海外での生活を考えており、日本での留学も考えたことがあるというのがその理由である。日立やオムロン等の企業でも視野が大きく広がり、まるで新世界の門を開いたかのように、新たな企業の在り方を知ることができた。

さようなら、日本。また会いましょう。

**日 付： 6月6日（火） 8日目**

**大学名： 对外経済貿易大学**

**氏 名： 閔一萱**

時間の流れる早さのため息をつくしかなかった。帰国の機内で日記を書いているこの時、本当に名残惜しいものがあった。月には満ち欠けがあり、人には出会いや別れなどがあるとは言え、実際に皆とお別れし日本を離れるこの時、心にぽっかりと穴が開いた様で、東京も昨日私たちが三菱商事の見学を終えた頃から雨が降り出し、そういった心情を代弁しているかのようであった。

朝は私たちが宿泊したホテルニューオータニのエコシステムを見学した。ここでは汚水や生ごみが再利用されていて、私は日本人の細やかさと環境保全への真摯な姿勢に感心した。同ホテルはまた長い歴史と優れたサービスで名高い。私は、こうした間近での観察を通してこそ日本企業の長寿の秘訣を知ることができると思った。

お昼、私たちは今回の訪日における最後のイベントである歓送会に参加した。歓送会には今回の訪日活動の主催側、運営側そしてホストファミリーの皆さんが集まった。私のホストファザーである宇田川さんも会場を訪れていた。私はこの日对外経済貿易大学を代表して日本語でのスピーチを行ったが、今回のスピーチほど自分の本音で話せたことはなかった。そのため、スピーチの際は心の底から日本を離れる寂しさを感じた。ホストファザーからも二人の娘さんが会いたがっているの、今度いつまた会いに来てくれるのかと聞かれた。渡る世間に鬼は無く、心は互いに響き合うものである。その瞬間、私は本当に帰国したくなかった。

勿論、私たちとこの数日間行動を共にした程団長、王麟先生、左先生、王先生、横山さん、中島さんそして団員の皆に対しても名残惜しい気持ちがある。今回の旅そして出会いは一生忘れることのないものであった。空港でセキュリティチェックに向かう際、後ろを振り返ると中島さんが涙を拭っているのを見かけ、人と人との絆の素晴らしさを感じた。この8日間を通じて私自身成長することができた。この数日間の経験や気持ちについて一つひとつ記すことはできないが、心の中に永遠に刻もうと思う。ありがとうございました！

6.6 機内にて

日 付：6月6日（火）8日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：王芙蓉

最終日の朝、私の心の中にある別れへの寂しさを吹き払うかの様に風が吹いていた。

この日のテーマはお世話になった方々への感謝である。午前にはホテルニューオータニでの見学であった。知っての通り、日本の水道水は直接飲むことができる。そして5つ星ホテルであるホテルニューオータニでは毎日の水使用量がとても多く、水の再利用やごみの回収再利用は特に重要なものとなっている。地下三階の水処理プラント内は通気が悪く、汚水を処理しているのも蒸し暑かったが、水には完全な処理がされていた。私が特に驚いたのは、木製の水槽で、その殺菌効果は素晴らしく、日本の木造家屋の建築方法で造られているため、釘がなかった。ホテルニューオータニには16基の水槽があり、最大のは900トン規模である。このことから同ホテルの正常な運営を保証するためにどれだけの貯水量が必要か分かる。その後私たちはごみの再利用プラントを見学した。日本には厳しいごみの分類規則があり、その理由のひとつは回収への利便性追求のためである。同ホテルでは同様に厳しいごみの分類規則があるが、ホテルのスタッフはそれらを種類ごとに回収再利用している。

ホテルニューオータニは建物自体の雄大さ以外にも、優美な庭園がある。そこには川が流れ、蓮やツツジの花が咲き、夜には蛍が現れ、夜に彩を添えている。15分ほど庭園を見て回った後、私たちは歓送会の会場に集合した。歓送会には多くのホストファミリーの方々が駆けつけていた。残念ながら私のホストファミリーの姿はなかったが、それでも他の方を通じて言伝を頂き、とても温かい気持ちになった。歓送会が始まり皆は食事をしながらこの数日間の様々な出来事や将来の事などについておしゃべりをした。そうした中でも時間は過ぎていき、そして日本商會と訪日団の各代表からの総括があった。その後、各大学の代表者から英語または日本語でのスピーチがあった。皆は自身が体験した様々な出来事から感想を述べていた。そして最後に皆さんへの感謝を表すため、私たちは訪日団の歌である『和你一樣(あなたと同じ)』を合唱した。

機内でこの最後の日記を書いているが、ここまで書いて急にどのように書いたらいいか分からなくなった。別れの名残惜しさと嬉しさが入り混じった感覚である。嬉しいというのは私たちが今回の活動が無事終了されたことへの嬉しさであり、名残惜しいというのは今回行動を共にした団員の皆で、それぞれ学校は違うがとても馬が合った。そして師であり友である団長、そして上手な通訳など、私たちの世話をしてくれた王先生、勿論日々常に私たちのために奔走してくれた中島さん、そして皆と語り合った8日間についても名残惜しく感じている。それでもお別れは避けられない。将来再会した際にまた共に語り、歌い、遊べることを願っている。

日 付：6月6日（火）8日目

大学名：北京交通大学

氏 名：任二祥

今日は訪日の8日目で最終日でもある。朝起きて自分が間もなく日本を離れることを改めて感じ、視界に入るものが自然とより大事に見えた。

朝食ではまたもやお粥を4杯食べた。お粥と漬物は毎朝欠かせないものである。ここ数日は日本料理を食べているが中々慣れない。日本料理については将来日本に来た時にまた体験したいと思う。朝食を済ませ、私たちはホテルニューオータニの見学を始めた。私は同ホテルの環境保全における理念とその行動に感心させられた。同ホテルは自ら汚水処理施設を建設し、汚水を浄化した後に再利用することで、毎年約200万人民元相当の経費を節約している。汚水の処理過程を見ていると気持ち悪くなってくるが、処理を終えた様子を見ると、心には称賛と敬服の気持ち、さらにそれ以上に残念な気持ちが芽生えた。残念な理由は、中国の多くの工場では工業廃水などを直接排出し、環境や水源を汚染しているからである。歴史は似たものであり、40数年前の日本においても環境汚染がひどく、河川では魚が死ぬといった状況があった。中国は現在痛みの時期にあり、私たちは日本から環境保全の技術や理念を学ぶ必

要がある。

ホテルニューオータニでは木製の貯水タンクを造り、ゲストに上質の飲用水を提供している。またごみを細かく分類し、生ごみについては肥料プラントを通じて有機肥料に変え、野菜等の仕入先に提供することで循環利用を形成している。エコロジー経済学の面については、中国はまだ多くを学ばなければならない。

歓送会での昼食の際、ホストファミリーのお父さんとお母さんと再会した。彼らとは二日間足らず一緒に生活しただけだが、彼らの親近感と優しさに感動した私は次回また日本を訪れ彼らと再会することを約束し、また彼らを中国に招待した。

歓送会の席上良いニュースが入った。中国が提唱する「一带一路」構想に対して、日本の安倍晋三首相が将来的な参加に前向きな姿勢を示したのである。これは中国と日本にとって良いニュースであり、日中関係が平和・友好的、また互恵的な方向へ健全に発展していくことを願っている。私は両国友好のボランティアとして、周りの人々に真実の日本の様子を知ってもらふ為に、日本で見聞きしたことを伝えていきたいと思う。